

中学生における関係性攻撃と認知特性および適応との関連 —敵意帰属を中心に—¹⁾

筑波大学大学院人間総合科学研究科 梅津 直子

東京成徳大学大学院心理学研究科 新井邦二郎

筑波大学人間系 濱口 佳和

The relationships between relational aggression, cognitive characteristics and adjustment in Japanese junior-high school students: Focusing on hostile attribution

Naoko Umezu (*Graduate School of Comprehensive Human Sciences, University of Tsukuba, Tsukuba 305-8572, Japan*)

Kunijiro Arai (*Graduate School of Psychology, Tokyo Seitoku University, Tokyo 114-0002, Japan*)

Yoshikazu Hamaguchi (*Faculty of Human Sciences, University of Tsukuba, Tsukuba 305-8572, Japan*)

The purpose of this study is to examine the relationships between relational aggression and Social Information Processing (SIP), by focusing on intent attribution which is the second step of SIP. We hypothesized that self-schema regarding being disliked by others (distrust self schema) and beliefs regarding the rationalizing of aggression (aggressive schema) promote hostile attribution because it is assumed that these schemata are referred to when inferring intention within SIP. Additionally we examine the relations between relational aggression and feelings of adjustment for school life. 390 Japanese junior-high school students (male=198, female=192) answered a self-report questionnaire that measures aggression/victimization, the two schemata, hostile attribution, and feelings of adjustment. The results indicate that hostile attribution within relational provocation contexts is affected by both schemata. This suggests that the distrust self-schema is used as a clue when making inferences about a provoker's behavioral intentions. High hostile attribution within relational situations predicts high relational aggression. Furthermore, the findings show that victimization from relational aggression negatively affects feelings of adjustment, while a relational aggressive tendency positively affects "approved as classmate" within boys.

Key words: relational aggression, physical aggression, bullying, junior-high school student, social information processing

問題と目的

文部科学省（2012年2月）の発表によれば、平成

22年度のいじめ認知件数は77,630件と今なお大きな社会問題と言える。その内訳は小学校4～6年生において22,211件、中学校の3年間で33,323件、高等学校7,018件と、中学生の時期がいじめの好発期となっている。いじめ被害は、PTSDをはじめとする不安や恐怖などの感情的な乱れ、自尊心の低下、不

1) 本研究は平成18年度に筑波大学人間学類に提出した卒業論文の一部を加筆・修正したものである。

登校・自殺などをもたらす危険性もあることから(下村, 1996), 中学生の適応を考える上でいじめは重大な問題であると言えよう。

いじめには、叩く・蹴るなどの暴力からなる「身体的攻撃 (physical aggression)」、悪口を言う、侮辱するなどの「言語的攻撃 (verbal aggression)」、仲間はずれや無視するなどの「関係性攻撃 (relational aggression)」といった様々な攻撃形態が含まれている。特に関係性攻撃は「仲間関係を操作することによって相手に危害を加えることを意図した攻撃行動」(Crick & Grotpeter, 1995) と定義されており、陰口を叩く、悪い噂を流す、仲間はずれにする、自分の要求に従わない場合は友情関係を解消すると脅すといった、人間関係を用いた攻撃である。小・中学生におけるいじめの様態を見てみると、「悪口を言う・からかう」「無視・仲間はずれ」が最も多く(森田・滝・秦・星野・若井, 1999), 多くのいじめが関係性攻撃の形態をとっていることがわかる。また松原(1999)は、被害者にとって暴力よりも、無視・仲間はずれなど心理的ないじめの方が苦痛であることを指摘している。さらに、これまでの暴力やいじめ防止プログラムは身体的攻撃に焦点が当てられていたため女子には効果が得られにくいとの報告もあり、関係性攻撃を考慮したいじめ防止プログラム開発の必要性が訴えられている(松尾, 2002)。以上よりいじめ問題を考える上で、関係性攻撃に焦点を当てることは重要であると考えられる。

関係性攻撃は被害者のみならず加害者についても様々な適応上の問題が指摘されている。関係性攻撃の高い児童は抑うつや孤独感、仲間からの拒否が高く(Crick & Grotpeter, 1995), 中学生女子において学校適応感が低いことが示されている(櫻井・小浜・新井, 2005)。これらのネガティブな影響は中長期にわたることが示されており、6ヶ月後の仲間受容への負の影響を予測すること(Crick, 1996)や8年間の追跡調査によって関係性攻撃をするほど好感度が低下すること(Cillessen & Borch, 2006)が明らかになっている。他方で、小学生女児では抑うつを低下させるというポジティブな影響が報告されている(坂井・山崎, 2003)。このように本邦では関係性攻撃が及ぼす適応への影響についての知見が一貫しておらず、学校段階や性別の違いにより適応への影響が異なる可能性が考えられ、さらなる調査が求められる。この点について、坂井・山崎(2003)は小学生の段階では、関係性攻撃が適応に対しポジティブに機能していたとしても、関係性攻撃を示し続けることで仲間関係が悪化し、やがて悪影響を及ぼすであろうと考察している。そこで本研究では関

係性攻撃を示す中学生が不適応感を持つか否か、その影響は男女により異なるか探索的に検討することとした。

関係性攻撃は多様な領域において適応に悪影響を及ぼす可能性があり、その生起メカニズムの解明および予防・介入について検討していくことは早急の課題と言える。その有力なアプローチのひとつとして、近年では社会的情報処理モデルが注目されている(濱口, 2002)。社会的情報処理モデルでは、对人的相互作用場面で得られた情報を、過去の経験から蓄積されたデータ・ベースを利用しながら処理し、社会的行動がもたらされると考える(Crick & Dodge, 1994)。それらの情報処理は、符号化、解釈、目標の明確化、反応の検索・構成、反応決定、実行という6つのステップを介して行われ、攻撃行動はいずれかのステップにおいてエラーや歪みが生じることで生起すると想定されている。攻撃性と社会的情報処理については多くの知見が蓄積されているが、研究対象となっている攻撃性の多くが顕在的攻撃であり(Crick, Grotpeter, & Bigbee, 2002), 関係性攻撃を対象とする研究は未だ少ない現状にある。また、対象者についても児童期が中心的であり、思春期に関しては犯罪青年が取り上げられるなど(Crick & Dodge, 1994; 濱口, 2002), いじめの好発期にあたる一般中学生を対象とした研究知見も乏しい。そこで本研究では、社会的情報処理、特に第2ステップにおける歪みと関係性攻撃の関連について検討することとした。

第2ステップ「解釈」段階は、得られた情報をデータ・ベースと照合しながら意味づける段階であり、相手の意図が問題にされることが多い。攻撃性とはそもそも知覚された脅威に対する防衛としての機能を持っていることから、敵意的な帰属によって挑発的な行動に反応しやすくなると考えられる。挑発的な行動に敏感になるとそれだけ攻撃行動が誘発されやすいため、社会的情報処理の中でも、敵意帰属は攻撃性を高める重要な要因の一つであろう。実際にCrick(1995)は身体的攻撃と同様に関係性攻撃においても敵意帰属バイアス(hostile attribution bias)が見られることを明らかにした。加えて、Crick, Grotpeter, & Bigbee(2002)によれば、高身体的攻撃児は「新しいラジオを壊されてしまう」といった道具的な挑発場面において相手の意図を敵意的に帰属し、高関係性攻撃児は「友人の誕生パーティーに自分だけ招待されない」といった関係性攻撃的な挑発場面において敵意帰属傾向が高まるという。自身の攻撃性に対応した文脈・場面において社会的情報処理の歪みが生じていることから、攻撃性

のみならず想定場面においても細分化した検討が求められると考えられる。よって本研究でも身体的攻撃と関係性攻撃の2つの場面に分け、それらの文脈が特異的に各攻撃性を高めるかについても合わせて検討することとした。

解釈段階では過去の経験により蓄積された社会的知識や信念といったデータ・ベースを参照することで意味づけがなされるが、攻撃児は「仲間は自分に対して敵意を持っている」というバイアスのかかった信念を持っており、それを加害者の意図を判断する際に影響を与えているという指摘 (Dodge & Tomlin, 1987; 濱口, 2002) がある。Dodge & Tomlin (1987) はこうした信念を「セルフ・スキーマ (self-schema)」と呼び、加害意図が不明瞭な場面であっても、攻撃児は「仲間は自分に対して敵意を持っている」「自分は嫌われている」といったセルフ・スキーマを意図の推論に利用するため、加害者は自分のことが嫌いだからわざと攻撃をした、というように加害者の行動を敵意的に解釈してしまうのではないかと考えられる。さらに、攻撃性と強い関連が指摘される信念に攻撃を正当化するか否かに関する規範信念 (normative belief) がある。Werner & Nixon (2005) は関係性攻撃を許容する信念が関係性攻撃を高めていることを明らかにした。また、越中 (2003) は幼児を対象として、関係性攻撃を行う男児は報復のためであれば関係性攻撃が正当であるとする信念を抱いている可能性を示唆している。だが、こうした信念を測定し、社会的情報処理との関連について検討した研究はこれまで見当たらない。よって本研究では、上述したスキーマがデータ・ベースとして利用されていると仮定し、仲間は自分のことを嫌っているという否定的な自己に関する信念を「不信セルフスキーマ」、気に入らない相手を傷つけたり、報復的な攻撃を許容する信念を「攻撃性スキーマ」として、敵意帰属バイアスとの関連について検討することとした。特に不信セルフスキーマを持つ者ほど、意図が曖昧な攻撃の行動を敵意的に帰属しやすくなると予想される。

本研究の目的

以上より、本研究では以下の仮説を検証することを目的とした。

仮説1：敵意帰属における歪みが関係性攻撃及び身体的攻撃の傾向を高める。すなわち、相手の加害意図が曖昧な挑発場面において相手の攻撃意図を敵意的に帰属するほど攻撃性は高まる。

仮説2：不信セルフスキーマを持つ者ほど敵意帰属

が高まる。

仮説3：関係性攻撃場面における社会的情報処理の顕著な歪みが関係性攻撃傾向を高める。身体的攻撃においても同様の傾向が見られる。

仮説4：関係性攻撃、および身体的攻撃の傾向が高いほど、不適応感が高い。

さらに、攻撃性の性差や攻撃性と認知特性・適応との関連の性差については探索的に検討することとした。

方 法

調査対象者：関東の公立中学校1校に通う中学生390名。なお分析に際しては回答に不備のあった78名を除外し、313名（1年生男子46名、女子48名、2年生男子45名、女子41名、3年生男子67名、女子66名）を分析対象とした。

調査時期：2006年11月。

調査方法：個別記入方式の質問紙を用いた。学級担任に依頼し、学級ごとに授業時間等を用いて配布してもらい、集団で調査を実施した。フェイスシートには、匿名性が保証されること、回答は成績に関係しないことを明記した。回答への抵抗およびプライバシーを配慮し、回答終了後に回答者自身が質問紙を厳封するよう求めた。

調査内容

(1) **不信セルフスキーマ / 攻撃性スキーマ：**不信セルフスキーマについては、中学生用内的作業モデル (粕谷・河村, 2005) の「不安/アンビバレント因子」を参考に、独自に作成した。「私は仲間から嫌われているのではないかと思う」などの8項目から成り、仲間から自己に対して否定的感覚を向けられているという信念を問う。攻撃性スキーマについては、攻撃を許容するようなスキーマを測定するもので、独自に作成した。「自分を傷つけた相手には何をしてもよいと思う」「嫌いな人が嫌な思いをするのはいい気味だ」など、報復的攻撃を正当化したリ、気に入らない相手に対する攻撃性を認めるといった内容から構成される7項目である。いずれも内容的妥当性を確保するため、発達心理学を専門とする大学教員1名と大学生4名により、作成された項目が概念に照らし合わせて適切であるか検討された。「1：全くあてはまらない」「2：あまりあてはまらない」「3：まあまああてはまる」「4：とてもあてはまる」の4件法で回答を求めた。

(2) **敵意帰属傾向：**敵意帰属の測定には、坂井・

山崎 (2004), 濱口・新井 (1992) を参考に独自に作成した質問紙を用いた。場面想定法を用い, 加害意図が曖昧な場面において登場人物の行為をどの程度敵意的に解釈するかを測定するもので, 挑発者が身体的攻撃を行う場面, 関係性攻撃を行う場面を各3場面ずつ呈示した。身体的攻撃場面については, ①廊下を歩いているところ走ってきた同級生と肩がぶつかり, しりもちをつく, ②級友の足につまずき足にけがを負う, ③窓枠に手をかけていたところ級友がいきなり窓を閉めて指にけがを負う, の3場面から成る。関係性攻撃場面は, ①挨拶に対する返事がない, ②側を通りかかった時に級友がこちらを見て何かをささやき笑う, ③談笑している級友に近づいた途端に話題が変わってしまう, という3つの場面から構成された。全て加害意図が曖昧な挑発場面であった。加害者が「意地悪しようとしていた」「怒らせようとしていた」など悪意を持って行動したと解釈される項目3項目, 故意ではなかったとする項目2項目に対し, 「1: まったくそう思わない」～「4: とてもそう思う」の4件法で回答を求めた。身体的攻撃場面, 関係性攻撃場面それぞれについて悪意を持って行動したとする項目3項目を合算し, 各場面における敵意帰属得点とした。故意ではなかったとする2項目については, 必ずしも敵意のなさを反映するものではないと考え, 除外した。Cronbach の α 係数を算出したところ, 関係性攻撃場面の敵意帰属は $\alpha = .79$, 身体的攻撃場面の敵意帰属は $\alpha = .65$ とほぼ満足できる値であった。得点範囲は3～36である。

(4) 関係性攻撃/身体的攻撃: 攻撃性の測定は小学生用攻撃性質問紙(坂井・山崎・曾我・大芦・鳥井・大竹, 2000)から「身体的攻撃」因子6項目, 関係性攻撃傾向尺度(櫻井, 2002)から, 「積極的關係性攻撃」因子7項目, 「消極的關係性攻撃」因子4項目, 「関係性攻撃被害」因子7項目を使用した。計24項目に対し, 「1: まったくあてはまらない」～「5: 非常によくあてはまる」の5件法で回答を求めた。

(5) 学校生活満足度: 適応感の測定には, 学校生活満足度尺度(中学生用)(河村, 1999)を使用した。中学校生活において自分の存在や行動が級友や教師に承認されているとする「承認・満足」(10項目), 不適応感や冷やかしのいじめの被害を反映する「被侵害・不適応」(10項目)の2下位尺度20項目からなる。「1: まったく思わない」～「5: とてもそう思う」の5件法で回答を求めた。Cronbach の α 係数は「承認・満足」が $\alpha = .81$, 「被侵害・不適応」が $\alpha = .79$ であった。

結 果

攻撃性スキーマ・不信セルフスキーマ質問紙の構成

不信セルフスキーマおよび攻撃性スキーマの各質問紙について一次元性を確認するため主成分分析を行った。

不信セルフスキーマでは, 第1主成分の負荷量の絶対値が, 5項目は.70以上であったが「私は, 人が自分を好いてくれているか気になるほうである」「友だちは自分以外に親しい友だちを作ろうとしているような気がする」の2項目が.50を下回った。そのためこの2項目を除外し再度主成分分析を実施した。結果をTable 1に示す。その結果, 第1主成分の負荷量の絶対値はいずれも.70以上となり, 寄与率は59.5%であった。

攻撃性スキーマに関しても同様の手続きで主成分分析を実施した。「たとえ相手に非があろうと, 自分から相手に嫌がるようなことをするのは良くないと思う」という1項目のみ.40を下回ったため, この項目を除いた7項目を用いて主成分分析を実施した。結果をTable 2に示す。第1主成分の負荷量の絶対値はいずれも.50以上となり, 寄与率は41.8%であった。

Cronbach の α 係数を算出したところ, 不信セルフスキーマが $\alpha = .80$, 攻撃性スキーマが $\alpha = .83$ であった。よって各スキーマが一次元構造であることが確

Table 1 不信セルフスキーマにおける主成分分析結果

項目内容	負荷量	共通性
2 私は, 友だちが私を好いてくれているのではないかと思うことがある	.74	.54
7 私は仲間から嫌われているのではないかと思うことがある	.77	.60
11 私は友だちにいじわるをされているのではないかと思うことがある	.77	.59
15 友だちが自分のことを裏切るような気がして不安になることがある	.77	.59
16 友だちは私をクラスやグループからのけ者にしようとしているのではないかと思うことがある	.80	.65
固有値		2.97

認された。この結果に基づき、加算平均した値を不信セルフスキーマ得点、攻撃性スキーマ得点とした。

攻撃性質問紙の構成

床効果が見られた6項目を除外した上で、攻撃性質問紙18項目について因子分析（主因子法 promax 回転）を行った。5.73, 2.73, 1.85, 1.06…と固有値が推移し、解釈可能性を考慮し、3因子構造を採用した。因子数を3に設定し再び同様の因子分析を

行った（Table 3）。第1因子は、「きらいな人が来たら、他の友だちとっしょに別の場所に行くことがある」等7項目からなる「関係性攻撃」、第2因子は「私は、友だちから仲間はずれにされていると思うことがある」等の5項目からなる「関係性攻撃被害」、第3因子は「たたかれたらたたき返す」等の6項目からなる「身体的攻撃」とした。Cronbachの α 係数は3因子とも.80を上回り、高い信頼性が確認された。各因子の全項目合計得点を項目数で

Table 2 攻撃性スキーマにおける主成分分析結果

項目内容	負荷量	共通性
1 自分を傷つけた相手には何をしてもいいと思う	.68	.47
3 嫌いな人が嫌な思いをするのはいい気味だ	.68	.46
8 自分が傷つけられたと感じたら仕返ししないと気がすまない	.63	.39
12 やられたらやり返してもよいと思う	.74	.55
5 たとえ相手が悪かったとしても責めてはいけないと思う (R)	.52	.27
6 気に入らない人にも優しくするべきだと思う (R)	.62	.39
10 嫌いな人とでも仲良くするべきだと思う (R)	.63	.40
	固有値	2.93

注：(R) は逆転項目である

Table 3 攻撃性質問紙の因子分析結果（主因子法、プロマックス回転）

質問項目	第1因子	第2因子	第3因子	共通性
第1因子：関係性攻撃 ($\alpha = .85$)				
23 きらいな人が来たら、他の友だちとっしょに別の場所に行くことがある	.75	-.01	.00	.55
9 きらいな人のよくないうわさを友だちに言う	.73	.02	-.03	.53
19 友だちといるときに、きらいな人がいたらその人とだけわざと話さないようにする	.72	-.16	.00	.43
6 きらいな人の秘密を、こっそりみんなにばらしたことがある	.69	-.12	-.02	.40
24 みんなで遊びに行くときなど、きらいな人にはそのことを教えなかったり、さそわないことがある	.66	.01	.04	.47
4 友だちと話しているときに、きらいな子が来たら急にだまったりこそそと話しをする	.64	.13	-.09	.45
3 きらいな人と、おもてでは仲良くしているけれど、その人がいなくなったら悪口をいうことがある	.51	.17	.06	.40
第2因子：関係性攻撃被害 ($\alpha = .87$)				
12 私は、友だちから仲間はずれにされていると思うことがある	-.07	.86	.04	.70
5 私は、友だちから無視されていると感じることがある	-.01	.83	-.11	.65
2 友だちグループから、嫌われているかもしれないと不安になる	-.09	.80	-.02	.57
13 友だちはみんな知っていることを、自分だけ教えてもらえないことがある	.03	.70	.00	.51
10 仲良くしている友だちでも、裏では自分の悪口を言っていると思う	.04	.65	.06	.47
第3因子：身体的攻撃 ($\alpha = .83$)				
18 たたかれたらたたき返す	-.05	-.05	.90	.75
7 たたかれたりけられたりしたら必ずやり返す	.04	-.10	.68	.47
15 自分を守るためなら暴力をふるうのもしかたない	.02	.07	.60	.40
22 人に乱暴なことをしたことがある	.16	.11	.60	.52
11 からかわれたらたたいたりけったりするかもしれない	.13	.14	.50	.39
17 どんなことがあっても人をたたいたりけったりしてはいけないと思う	.24	.13	-.47	.20
	因子間相関	F2	.46	
		F3	.45	.19

割った得点を、各因子の得点として以後の分析に使用した。

関係性攻撃性と各変数との関連

関係性攻撃と各変数の関連を見るため、相関係数を算出した (Table 4)。その結果、関係性攻撃については、ほぼ全ての変数と関連が見られ、関係性攻撃被害および身体的攻撃と有意な正の相関が、また両スキーマとも正の相関が見られた。また、関係性攻撃、身体的攻撃の両場面における敵意帰属においても弱い正の相関が示された。加えて学校生活満足度尺度の承認・満足、被侵害・不適応の両下位尺度とも有意な正の相関が認められた。

一方、身体的攻撃は攻撃性スキーマとやや高い正の相関が見られ、関係性攻撃よりも高い値であった。不信セルフスキーマや敵意帰属、学校生活満足度とは有意な関連が認められなかった。

攻撃性および敵意帰属の性差

攻撃性、敵意帰属の性差を検討するため、性別を独立変数、攻撃性および敵意帰属を従属変数とする t 検定を行った (Table 5)。その結果、男子の方が女子より身体的攻撃が高く ($t(303) = 5.60, p < .001$)、関係性攻撃被害では女子の方が高かった ($t(306) =$

$-2.32, p < .05$)。関係性攻撃では有意な差が見られなかった。また、敵意帰属では身体的攻撃場面において有意な性差が見られ、男子の方が身体的攻撃場面における敵意帰属得点が高かった ($t(284) = 2.03, p < .05$)。

以上より、攻撃性や敵意帰属には性差があることが明らかとなった。性別によって攻撃性のあり方や認知的特徴が異なる可能性が示唆されたため、以後の分析は男女別に実施した。

スキーマ、敵意帰属が攻撃性に及ぼす影響

スキーマが敵意帰属を媒介として攻撃性を高め、攻撃性が適応感に与える影響を明らかにするため、重回帰分析 (強制投入法) の繰り返しによるパス解析を行った。解析の結果を Fig. 1, Fig. 2 に示す。図に示した通り、男女とも不信セルフスキーマ、攻撃性スキーマともに関係性攻撃場面および身体的攻撃場面における敵意帰属に対して正の標準回帰係数が認められた。男女ともに関係性攻撃場面における敵意帰属が関係性攻撃に正のパスを示した。また、男子のみ関係性攻撃場面における敵意帰属が身体的攻撃に有意な正の標準回帰係数が認められた。男女とも身体的攻撃場面における敵意帰属から攻撃性へのパスは示されなかった。関係性攻撃被害は承認・満

Table 4 各変数の記述統計および攻撃性と各変数間の相関係数

	関係性攻撃	身体的攻撃	関係性攻撃被害	平均値	SD
関係性攻撃				2.45	(.86)
身体的攻撃	.38***			2.96	(.90)
関係性攻撃被害	.38***	.17**		2.51	(.98)
関係性攻撃 - 敵意帰属	.31***	.09	.28***	2.17	(.70)
身体的攻撃 - 敵意帰属	.28***	.09	.24***	2.37	(.58)
不信セルフスキーマ	.34***	.10 [†]	.78***	22.73	(5.09)
攻撃性スキーマ	.44***	.54***	.05	19.51	(5.24)
承認・満足	.12*	.05	-.13*	3.28	(.67)
被侵害・不適応	.24***	.09	.64***	2.17	(.66)

注: [†] $p < .10$ * $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

Table 5 男女別の攻撃性及び敵意帰属の得点

	男子		女子		t 値
	平均	SD	平均	SD	
関係性攻撃	2.43	(.87)	2.48	(.87)	-0.42n.s.
身体的攻撃	3.23	(.89)	2.68	(.83)	5.60***
関係性攻撃被害	2.38	(.98)	2.64	(.96)	-2.32*
関係性攻撃 - 敵意	22.76	(5.26)	22.69	(4.93)	0.12n.s.
身体的攻撃 - 敵意	20.12	(5.24)	18.87	(5.17)	2.03*

*: $p < .05$ ***: $p < .001$

足に負のパスを、被害者・不適応に強い負のパスを示す一方で、男子において関係性攻撃傾向から承認・満足へと正のパスが示された。

考 察

攻撃性・社会的情報処理の性差と攻撃者の特徴

関係性攻撃、身体的攻撃の性差について検討したところ、関係性攻撃においては有意な性差が見られなかったが、身体的攻撃は男子の方が得点が高かった。関係性攻撃の性差については女子に多いとする研究（例えばCrick & Grotpeter, 1995）、逆に男子に多いとする研究（例えばGoldstein, Tisak, & Boxer, 2002）、差はないとする研究もあり（例えばGalen & Underwood, 1997）、未だその議論に決着はついていない。国内の研究においては一貫して性差は見られず（例えば磯部・佐藤, 2003；坂井・山崎, 2003）、本研究もそれを支持する結果となった。わが国には西欧人に比べ、和を尊び、人間関係において表面上波風を立てないよう気遣う文化的な背景がある（高田, 1999）。このように人間関係を重視する文化では男性にとっても女性にとっても人間関係は大事であるのでこれを損なう関係性攻撃はいずれの性にとっても影響力が大きい。したがって男女とも人を傷つける方法として等しく用い、頻度に性差が見られないのかもしれない。他方で、関係性攻撃

の被害は女子の方が得点が高いという結果が得られた。女子の方が関係性攻撃のターゲットとなりやすい可能性もあるが、中学生は同性同士のインフォーマルな仲間集団が形成されやすい時期であると考えられ、仲間集団内で関係性攻撃が行われるのであれば、女子の方が自身の関係性攻撃を低く見積もっている可能性も否めない。今後のより詳細な検討が求められるだろう。

男子は身体的攻撃場面で敵意帰属傾向が高まり、女子に比べ相対的に歪みが見られる結果となった。男子の方が女子に比べ身体的攻撃の頻度も高いことから、男子の方が身体的攻撃に至りやすい情報処理をしていると考えられる。

相関分析の結果から、関係性攻撃と身体的攻撃との間に有意な正の相関が見られた。これは先行研究と同様の結果（例えばCrick & Grotpeter, 1995; Cillessen & Borch, 2006）であり、本邦の中学生においても、特定の攻撃によるのではなく、関係性攻撃と身体的攻撃の両方を行う者が一定数含まれると考えられる。また、関係性攻撃と「関係性攻撃被害」や「被害者・不適応」と正の相関が示されたことから、関係性攻撃者は自身で関係性攻撃を行いつつも、いじめや冷やかし、中でも仲間はずれや無視されるといった関係性攻撃の被害を受けている可能性が考えられる。あるいは関係性攻撃を受けた報復として関係性攻撃が高まっているとも考えられる。他

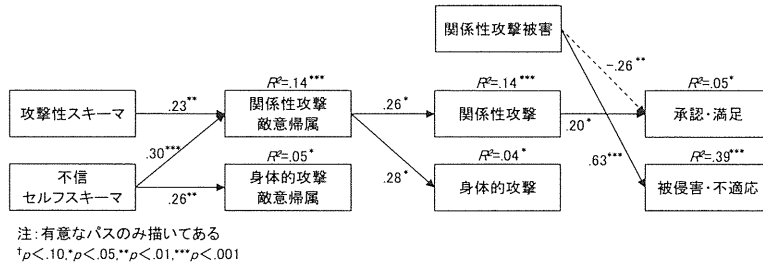


Fig. 1 男子におけるパス・ダイアグラム

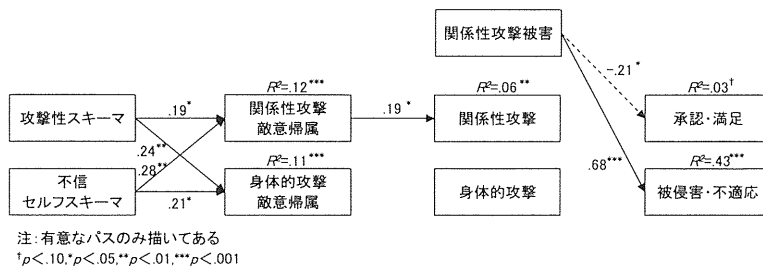


Fig. 2 女子におけるパス・ダイアグラム

方で、わずかながら「承認・満足」と正の関連が見られたほか、パス解析において男子では有意な正のパスが示された。一見矛盾している結果だが、承認・満足は学級や部活内の仲間、先生から自分の存在や行動が認められていると感じている指標であり、関係性攻撃はグループなど複数人いて成立する行動が含まれるため、一緒になって無視をしたり、陰口を言う友人がいるという事実が仲間を受容している感覚につながっているのではないかと考えられる。先行研究においても高関係性攻撃者は抑うつが低いとするもの(坂井・山崎, 2003)と、孤独感が高いなど精神的健康を害するもの(Crick & Grotpeter, 1995)があるが、本研究で得られた結果もそうした関係性攻撃者の2面性や複雑さを表すものなのではないかと推測される。

スキーマが敵意帰属を媒介として攻撃性に及ぼす影響

パス解析の結果から、男女ともに不信セルフスキーマ、攻撃性スキーマが関係性攻撃、身体的攻撃の両場面における敵意帰属を高める結果となった。この結果から、不信セルフスキーマが挑発者の行動の意図を推論する際に手がかりとして用いられるだろうとの仮説は支持されたと言える。自分が仲間から嫌われているという自己についての否定的な感覚から推論し、実際は悪意のないようなささいな出来事も挑発者は“わざとやったのだろう”“自分を傷つけようとしたのだろう”と解釈していると考えられる。また、攻撃性スキーマについても敵意帰属に影響を及ぼしていた。攻撃性スキーマは嫌いな人に対する攻撃や報復としての攻撃を許容するような内容であったことから、意図に関わらず攻撃的に見える行動は相手を痛めつけようとする意図を孕んだもの、という理解がなされているのかもしれない。

敵意帰属が攻撃性に及ぼす影響については男女によって若干の差異が見られた。男子では、関係性攻撃場面において相手の意図を敵意的に帰属するほど関係性攻撃、身体的攻撃のいずれも行いやすいことが明らかになった。男子では各場面の解釈バイアスが生じやすいとその場面に対応した攻撃性が高まるという仮説は支持されず、関係性攻撃被害を受けると両方の攻撃手段を使って報復しようとする可能性が示唆された。一方女子では、関係性攻撃については仮説が支持され、関係性攻撃場面において敵意的に意図を帰属するほど関係性攻撃が高まる結果となった。対して身体的攻撃については有意なパスが得られなかった。男女ともに身体的攻撃を受けた場面ではいずれの攻撃性にもつながらなかったことか

ら、他の方法により対処しているものと考えられる。身体的攻撃における結果は小学生を対象としたCrick et al. (2002)の結果と一致しないものであり、男女差についても報告されていない。Crick et al. (2002)では挑発場面を身体的攻撃被害に限らず、持ち物に対する損害といった道具的挑発場面での敵意帰属を測定している。先行研究との不一致はこのような測定法の違いや発達・文化による差異から生じている可能性があり、今後の詳細な検討が求められるだろう。

以上の結果から、攻撃性を低減するには敵意帰属段階での歪みを是正することが有効であると考えられる。特に男子では敵意帰属から攻撃性へと複数のパスが生じたことから男子に対する介入効果が期待できるだろう。周囲の状況や相手との関係性など多様な情報に目を向けるよう支援するのはもちろん、解釈の際、不信セルフスキーマを用いる可能性があるのも、そのスキーマを変容させたり、仲間から嫌われているわけではないという経験を持たせることで敵意帰属の歪みを緩和することができる可能性がある。また敵意の推論は攻撃性スキーマからも影響を受けやすいことから、攻撃性スキーマを変容させることも重要なアプローチであると考えられる。

関係性攻撃が適応感へ及ぼす影響

男子では、関係性攻撃が高まるほど承認・満足も高まるという結果が得られ、不適応に陥ると想定した仮説に反する結果となった。しかし、関係性攻撃をすることで「承認・満足」が得られるかどうかは、関係性攻撃を行う状況に依存すると思われる。例えば仲間を操作して、無視や仲間はずれを誘導する立場にある者は、学級の中でもリーダーシップをとったり、積極的に活動に関与できるかもしれない。また友人に嫌われているかもしれないという不安を持つ者が、関係性攻撃を通して加害者同士で親密感を得ていると考えられる。一方で、自分がいつターゲットになるかわからない不安を持っていたり、関係性攻撃をすることを止めると仲間として受け入れてもらえないという不安を感じている者もいるであろう。関係性攻撃を行う者には多様な背景が考えられ、男女における承認・満足の一貫しない結果をもたらしていると思われる。身体的攻撃については、承認・満足、被侵害・不適応との関連は見られなかった。本研究では適応に影響を及ぼす要因として関係性攻撃被害を含めた分析を行ったことから、被害経験の適応問題の深刻さがより際立って表れたと考えられる。

本研究のまとめと制約

本研究では、不信セルフスキーマ・攻撃性スキーマといった信念が侵害意図の曖昧な場面での解釈を行う際に手がかりとして利用され、解釈バイアスによって攻撃性を高める。さらに攻撃行動の結果として仲間から受容されにくくなるなどの不適応をもたらすという仮説を検証するものであった。

仮説1～3については、部分的に仮説を支持する結果が得られた。特に関係性攻撃に注目すると、男女ともに両スキーマが関係性攻撃場面における敵意的帰属を高め、関係性攻撃性をもたらすことが示唆された。以上より特定場面のみでの意図の解釈に対する指導・介入だけでなく、スキーマレベルでの変容を促すことで、攻撃性を低減させる可能性が示唆されたと言える。すなわち、仲間から受容される機会を作ることや自尊心を高める援助、仲間関係を良好に保つスキルトレーニング、攻撃性に対する規範意識を構築していく取り組みが、攻撃的行動・認知の変容に寄与するかもしれない。加えて、相関分析の結果から関係性攻撃の加害と被害との間に関連が見られたことから、報復の手段として攻撃が行われている可能性がある。よって、被害経験者に対するケアを行うとともに、関係性攻撃を受けた時に適応的に対処するためのスキルを育てる必要があると考えられる。

攻撃性と適応感の関連については仮説4とは異なり、攻撃性の高さが必ずしも、本人の適応感を低下させるものではないことが示された。しかし、それは被害者の深刻な不適応という犠牲の上に成り立つ適応感であるといえよう。また、Crick (1996) や Cillessen & Borch (2006) が明らかにしているように、現在は適応的であっても長期的に見れば、精神的健康や適応感に負の影響をもたらす可能性もある。今後はより長期的デザインによる検討や上位の発達段階を対象とした研究が必要であろう。

最後に、本研究の問題点について述べたい。第1に質問紙の妥当性、信頼性の問題である。スキーマおよび敵意帰属に関する質問紙は妥当性、信頼性が検証されておらず、本研究で得られた知見を早急に一般化することはできない。第2に、本研究は中学校1校のみを対象としている点である。いじめの問題は学校や学級の風土と密接に関わっていると考えられ、本研究で得られた結果が中学生全体に一般化できるか否かは判断できない。今後、十分なサンプル数を確保した上での追試が求められる。

引用文献

- Cillessen, A.H.N., & Borch, C. (2006). Developmental trajectories of adolescent popularity: A growth curve modeling analysis. *Journal of Adolescence*, 29, 935-959.
- Crick, N.R. (1995). Relational aggression: The role of intent attribution, feelings of distress, and provocation type. *Development and Psychopathology*, 7, 313-322.
- Crick, N.R. (1996). The Role of overt aggression, relational aggression, and prosocial behavior in children's future social adjustment. *Child Development*, 67, 2317-2327.
- Crick, N.R., & Dodge, K.A. (1994). A review and reformulation of social information processing mechanisms in children's social adjustment. *Psychological Bulletin*, 115, 74-101.
- Crick, N.R., & Grotpeter, J.K. (1995). Relational aggression, gender, and social-psychological adjustment. *Child Development*, 66, 710-722
- Crick, N.R., Grotpeter, J.K., & Bigbee, M.A. (2002). Relationally and physically aggressive children's intent attribution and feelings of distress for relational and instrumental peer provocations. *Child Development*, 73, 1134-1142.
- Dodge, K.A., & Tomlin, A.M. (1987). Utilization of self schemas as a mechanism of interpretational bias in aggressive children. *Social Cognition*, 5, 280-300.
- 越中康治 (2005). 仮想場面における挑発、報復、制裁としての攻撃に対する幼児の道徳的判断教育心理学研究, 53, 479-490.
- Galen, B.R., & Underwood, M.K. (1997). A developmental investigation of social aggression among children. *Developmental Psychology*, 33, 589-600.
- Goldstein, S.E., Tisak, M.S., & Boxer, P. (2002). Preschooler's normative and prescriptive judgments about relational and overt aggression. *Early Education and Development*, 13, 23-39.
- 濱口佳和 (2002). 第3章攻撃性と情報処理 山崎勝之・島井哲志 (編) 攻撃性の行動科学—発達・教育編— ナカニシヤ出版 pp.40-54.
- 濱口佳和・新井邦二郎 (1992). 児童の社会的情報処理と行動との関連についての研究—仲間による挑発場面をめぐって— 筑波大学心理学研究, 14, 107-119.

- 磯部美良・佐藤正二 (2003). 幼児の関係性攻撃と社会的スキル 教育心理学研究, **51**, 13-21.
- 河村茂雄 (1999). 生徒の援助ニーズを把握するための尺度の開発 (1) —学校生活満足度尺度 (中学生用) の作成— カウンセリング研究, **32**, 274-282.
- 粕谷貴志・河村茂雄 (2005). 中学生の内的作業モデル把握の試み—尺度の信頼性・妥当性の検討— カウンセリング研究, **38**, 141-148.
- 松原由枝 (1999). いじめの具体的内容 松原達哉 (編) 普通の子がふるう暴力—いじめ・暴力の心理と予防・指導法 教育開発研究所
- 松尾直博 (2002). 学校における暴力・いじめ防止プログラムの動向—学校・学級単位での取り組み 教育心理学研究, **50**, 487-499.
- 文部科学省 (2012). 平成20年度児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査 <<http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/NewList.do?tid=000001016708>> (2011年3月22日)
- 森田洋司・滝 充・秦 政春・星野周弘・若井彌一 (1999). 日本のいじめ—予防・対応に生かすデータ集 金子書房
- 坂井明子・山崎勝之 (2003). 小学生における3タイプの攻撃性が抑うつと学校生活享受感情に及ぼす影響 学校保健研究, **45**, 65-75.
- 坂井明子・山崎勝之 (2004). 小学生における3タイプの攻撃性が攻撃反応の評価および結果予測に及ぼす影響 教育心理学研究, **52**, 298-309.
- 坂井明子・山崎勝之・曾我祥子・大芦 治・島井哲志・大竹恵子 (2000). 小学生攻撃性質問紙の作成と信頼性, 妥当性の検討 学校保健研究, **42**, 423-433.
- 櫻井良子 (2002). 中学生における関係性攻撃の特徴 筑波大学心理学研究科中間論文 (未公刊)
- 櫻井良子・小浜 駿・新井邦二郎 (2005). 中学生における関係性攻撃傾向の検討—同調行動および学校適応感の関連— 筑波大学発達臨床心理学研究, **17**, 39-44.
- 下村哲夫 (1996). いじめ・不登校 ぎょうせい
- 高田利武 (1999). 日本文化における相互独立性・相互協調性の発達過程: 比較文化的・横断的資料による実証的検討 教育心理学研究, **47**, 480-489.
- Werner, N.E., & Nixon, C.L. (2005). Normative beliefs and relational aggression: An investigation of the cognitive bases of adolescent aggressive behavior. *Journal of Youth and Adolescence*, **34**, 229-243.

(受稿3月30日: 受理5月7日)